跡見学園女子大学文学部紀要　第四十号　（二〇〇七年三月十五日）

ナバホ族創世神話の中のナドレ

――宇宙観とジェンダー研究序説――

藤崎康彦

Ⅰ　問題の所在

Ⅰ―1　はじめに

北米先住民諸族に触れたヨーロッパ人植民者などは、先住民の文化に彼らの目からは奇異な現象を見出し、そういう行為や表現をしているように見える人をベルダーシュとしてカテゴリー化するようになった。ベルダーシュといわれる人たちは生物的には男であるのに、性的に「おぞましい」行為を行い、服装を女性のそれに替え、女の仕事を日常的に行う、主としてそういう人たちであると見られた（cf. Williams 1986）。彼らは男であるのに女として振る舞うように思えることが、ヨーロッパ人に衝撃を与えたのである。

この「おぞましい」行為は具体的には男性間の性的行為であったり、男性同士での婚姻に相当する関係であったりを指していると考えられている。報告として奇異なことに、女性の仕事や服装については観察に基づく記述があるが、性的な行為には明示的な記述がほとんどない。報告するヨーロッパ人に性的な現象をことばに表現することに対して強い抵抗があったので、間接的な、あるいは曖昧な表現しか用いていないからであるとされる。にもかかわらずそれらの表現の指し示す内容が男性の同性間性関係を指していると研究者間で了解されているのは、文献に見られる「嫌悪のレトリック」（Murray et. al. 1998:10）に対するある程度の共通の理解があるからである。

一九六〇年代以降、主としてアメリカで、セクシュアリティの多様性に対する寛容を求める運動が盛んになり、近年はそれらの脈絡で「第三の性／ジェンダー（third sex/gender）」が話題になるようになった。ベルダーシュもそれらの関連で人類学以外の分野でも注目されるようになったのである。その中にはベルダーシュをゲイやトランスセックス／トランスジェンダーなどの観点から評価する考え方も含まれており、それは過去の文献に「嫌悪のレトリック」を通して逆に、北米先住民の中には男性の同性間性関係が社会的制度として存在していたと理解する読みをしたからである（cf. Jacobs et. al. 1997, Herdt 1996）。

I－2　ジェンダー

ジェンダーという語の本稿での用法を先ず述べておく。ここでは言語学でいうジェンダーを基本とする。あらゆるものをことばで分類する原理の一つとしてのジェンダーである。ヨーロッパ語には事物を「男性（male）」「女性（female）」及び「中性（neuter）」のいずれかに区別する言語がある。それが人に適用されたときには日常の意味で使う男女のジェンダーとして理解されるのだが、しかし人の場合そこには分類原理とは別の様々な意味がまとわりつく。それを避けて単純に、その文化で人を分類する項目の一つと理解する。

少なくともこのような意味でのジェンダーという限り、その民族なり部族なりの社会的認知を受け、制度的な是認を得ているものであることが概念の根本に存在せねばならないであろう。「男／女」というジェンダーはその社会の「人のカテゴリー」であり、様々な基準によって分類されて社会の秩序を形成する社会的カテゴリーの一つである。秩序を形成維持するためのカテゴリーとして、例えば「人／子供（成人／未成年）」、「王／平民」など様々なものを考えることができるが、少なくともこれまではジェンダーはそういうものの一つであったのである。

仮に「第三のジェンダー」というなら、「男／女」とは異なる、かつそれと同等の、あるいは並立する、カテゴリーとしてその社会の認知を得ている必要があろう。それはどのようにして確かめることができるか。いま現在直接の観察で確かめることができるものであればともかく、ベルダーシュのほとんどはかつてそのような人がいたという断片的な記事しかない。そういう人がいたというヨーロッパ人の証言が仮に信用できるとしても、その人々が社会的にどのような位置づけを受けていたかは不明である。その人の地位が制度的に確立したものであったのか、それとも個人特異的な表現にその集団の人々がただ寛容であっただけなのか、などもよく分からない。ベルダーシュなどがかつては仮に伝統的な地位やカテゴリーであったとしても、白人たちの強い嫌悪と弾圧を受けてその制度は一度はほとんど途絶えたものと考えられる。近年注目されるようになり、それらをモデルとして自らのセクシュアリティを正当化（あるいは正統化）する志向性や運動などがあるが（cf. Jacobs et. al. 1997）、それとかつての社会の価値観とを無条件に同一視することは適当ではないだろう。伝統的文化の「人のカテゴリー」を知るにはその社会の様々な制度をその社会の脈絡で分析する必要があるはずである。[1]

I—3　神話

このような問題の一つの手懸りは、その社会の神話や伝承を参照することである。一般に神話などは事物の起源などを説明し、現在の秩序を基礎付けて正当化／正統化する効果を持つ。もちろんその社会の人々が宇宙を概念的に認識するときの基盤でもある。神話などは、その社会の人々が世界をどのように見ているかをうかがう手懸りになるのである。

例えばよく知られているように旧約聖書においては人とは先ず男であり、女はそこから派生した存在として語られる（Levy 1998:14-15）。古代ユダヤの民は世に男と女がいることを特に説明しなければならないと考えたかのようである。これに対して、古事記では初めから男神／女神がいて、男女の存在自体は特に問われることなく前提にされているように見える。神話を見ると、その社会に存在するもののカテゴリーやその意味づけなどについての何らかの手懸りが得られるのである。

なお、多くの資料を参照してみて、ナバホ研究者の間でも用語としてmythとlegendを互いに厳密に使い分けているわけではないことが知られる。人によって同じ創世の物語を指すのにmythといったりlegendさらにはstoryといったりまちまちである。従って、以下本稿では神話や伝説を用語として厳密に区別せず、簡略に神話とのみ表記する。

I—4　構成

本稿の構成として、先ずナバホ族の神話テキストの紹介と検討を行う。なぜナバホかは最も人類学的資料の多い部族の一つであるからだ。ナバホ神話の中にはベルダーシュと普通理解されている「ナドレ」が出てくる。その神話テキストが多いのである。しかしテキストが多いことは、それ自体が一つの問題でもあり得る。

ナバホは文字を持たない文化であった。（今もそうである。）白人社会の圧迫を受けて大きく社会が動揺したり文化が変容したりする恐れのなかで、神話は優れた語り手によってかろうじて保持されていたのである。それらの口頭伝承の多くは一九世紀から二〇世紀にかけて白人のアメリカ人たちが文字や音声記号に定着させていった。従って、複数の語り手による複数の記録がある。テキストとしていわば定本があるわけではないのである。しかし、多くのバージョンに共通の構造として、歴史を反映していると思われる大きく性質の異なる二つの部分を識別することができる。ほとんどの語りにおいてナドレはその境界部分に登場するのである。従って、共通構造を概観した後、ナドレに関する部分からその特徴をテキストを比較して抽出する。その後、創世神話のなかでナドレのおかれている意味を考察する。最後に結論に替えて、議論のまとめを行う。

II　資料

II—1　ナバホの歴史

ナバホがヨーロッパ人の歴史文書に登場するのは一六二六年であり、フランシスコ派の修道士によってである（Kluckhohn et. al. 1974:35）。そのころにはすでに農業を行っていたようだ。ナバホはもともと北米大

陸北部に狩猟民として生活していた。それが次第に南下し、十六世紀頃には北米大陸の南西部にきて、次第に農耕民であるプエブロ族と接触した。ナバホは彼らから農耕を学び、狩猟から次第に農耕に比重を移した。その後メキシコのスペイン人との接触が十八世紀初めにあった。生業からいうと、十八世紀にはすでに羊が導入され、十九世紀にかけて牧羊を主とする生活に移っていったようだ。十九世紀半ば過ぎに部族全体がアメリカ陸軍に抑留され、最終的にアメリカ政府によって設定された居留地で暮らすようになったことを通じて、二〇世紀初め頃からは雇用による賃金が主たる生計手段になっている。ナバホの生活様式が大きく変化したのは一六二六年から一八四六年（米墨戦争）の間であるとクラックホーンらはいう（Kluckhohn et. al. 1974:37）。それはちょうどナバホが狩猟から離れ、農業や牧羊を主としてゆく時期である。その過程で親族構造や、婚姻制度、宗教、工芸技術など広範に変化が起きたようだ。親族制度も双系的な出自から母系出自へ、婚姻も夫方居住から妻方居住へと変わったと思われる。宗教でいえば、シャーマンが中心の宗教から司祭が担うそれへと移り変わっていく。それらが、これから考察する対象である創世神話の「出現」の中の、男女の「分離」のエピソードに影響を及ぼしているであろうとすることは無理のある想定ではない。

Ⅱ－2　テキストとしての神話

Ⅱ－2－a　神話の種類

ナバホ族の神話には大きく二つが区別される。創世神話と儀礼神話である。創世神話は地下から現在の世界への「出現」と、現在の世界でのナバホの発展を語る多くのエピソードからなる。語り手によってかなり違うが、地下からの「出現」とその後という基本構造は多くのテキストに共通している。儀礼神話は、それらのエピソードに関係しているものと、独立の物語であるものとの双方がある。登場人物などは多く共通している。ただしそれらの性格付けはかなり変異がある。儀礼神話は実際のナバホの生活の中で行われる儀礼の典拠となるような性質を持つ。ナバホには祝福、除災、治療などの多様な目的に対応する儀礼がある。それらは儀礼執行者である祈祷師あるいは呪医（medicine man）による詠唱歌の詠唱がその中心的内容であるようだ。従って、儀礼を時にchantとかsongとかということもある。治療を目的にした場合などには砂絵（sand painting。またdry paintingともいう。）も作られることがある。儀礼の名は英語に訳されるときwayがつけられて、例えばNight Way（Nightway）などと呼ばれる。そこで詠唱される歌はNight Chantである。本稿ではいくつか儀礼神話も参照したが、基本的に創世神話に考察を限った。

Ⅱ－2－b　テキストの種類

創世神話あるいは起源神話として刊行されているテキストは数え方によっても変わるものの、例えばナバホの創世神話を素材に比較神話学的考察をしているレヴィによれば八点ある（Levy 1998:40-41）。それら全てと、本稿ではレヴィが挙げていない他のテキスト一点も検討の対象に

しているので、資料として基本的なテキストは網羅したものと考える。（参考文献で1から9までの番号を付した。）

これらのテキストのほとんどはナバホの話者に語ってもらったものをプロのあるいはアマチュアの研究者が採録し、英訳したものである。従って、話者が多くの場合特定できている。話者でいうと延七人で実質五人程度と思われる。レヴィによれば、同じ話者が二つの異なる機会にそれぞれ異なる調査者に話している例が二例あるからである。テキストに言及するときには記録者すなわちテキストの著者の名に「版」をつけて表記する。記録者が異なる同一の話者のテキストは記録者-話者と二つを組み合わせて表示する。

テキストによっては、話者の語りをナバホ語のままアルファベットを利用して音声を写し取った表記法で記録したものと、その英訳とを併せて収録しているものもある。音声の表記法は研究者によってシステムが多少異なっている。正書法といえるものはこれらのテキストが作成された頃にはなかった。従って、ここで「ナドレ」と表記するものも、元のテキストでは様々な表記になっている。

これらの資料は、その詳しさや、内容は様々である。基本的な骨組みにおいてはほぼ同一とみることもできるが、登場人物やエピソードの位置や内容などはかなり違いがある。しかし、本稿の目的であるナドレに関する部分だけをとってみると、細部に違いは少なくないものの、そこに基本的な共通性は明瞭に認めることができる。その共通性を考察の対象にしたい。ただし後に触れるフィシュラー版のように異質なテキストも存在する。

なおテキストを分析の対象とすること、複数のテキストを比較することなどの方法論的な問題は、議論してから考察にはいるべきであろうが、今回は紙幅の関係から省き、本稿と同時に用意している別稿において行う予定である（cf. 藤崎二〇〇七）。

Ⅱ—2—c　創世神話の構造

創世神話あるいは起源神話はここでは同じ意味に使う。ナバホでは世界ができていくことと、人が生まれてくることとは同じ物語であるからである。ナバホの起源神話についてマシューズは次のように述べている（Matthews 1994:51）。

> 起源伝説は四つのきわめて明瞭な部分あるいは章に分かれる。すなわち、1、出現（emergence）の物語、2、第五世界における初期の出来事、3、戦の神々、4、ナバホ民族の発展、である。最初の部分の名は、ナバホの物語話者たちによって付けられたものである。その他の部分の名は筆者が付けた。この最初の部分、つまり「出現の物語」は人々が第四世界からこの第五世界の地表に現れ出たことが語られるところで終わる。

これについてはスペンサーもナバホ神話のモチーフを分析して、これらの要素が多くの場合共通に含まれていることを述べている（Spencer

1947)。ほぼこのような構造を持つものと理解してよいであろう。これから述べるようにナドレはこの「出現」の中に登場する。従って本稿ではこの「出現」のエピソードを中心的な考察の対象とする。本来なら参照したテキストの「出現」部分を中心にナドレの出てくるところを全て引用紹介して、その上で議論をするのが理想的であろう。しかしながら、その場合量的に極めて大きくなり、一つの論文にまとめるには現実的ではなくなる。先ず代表的なテキストを要約し、その上で他のテキストにも共通している特徴を抽出して考察することにしたい。

Ⅱ−2−d　「出現」部分粗筋

以下はゾルブロッドの作品（Zolbrod 1984）の第一部「出現」を粗筋としてまとめたものである。ゾルブロッドの基になっているマシューズ版も対応させて参照した。その際、本稿の論述に必要な男女の「分離」のエピソードは比較的詳しく、その他は大幅に簡略化してまとめた。

Ⅱ−2−d−i　第四世界への上昇まで

宇宙は地面があった。最初は光はなく方位と色だけがあった。東に白、南に青、西に黄、北に黒があった。白と青が昼を、黄と黒が夜を構成していた。地上には（生き物は）「空気の精の人々」がいた。セミやアリやカブトムシのような昆虫類である。地面の東南西北の果てには海があった。それぞれの方位の海には生き物がいて、それぞれの長が治めていた。「空気の精の人々」は性的に放縦で互いに姦通を行っていた。それで、もめ事が絶えなかった。海にいるそれぞれの長はこれを怒り、他所に行くよう望んでいた。もめ事が続いているある時、四方から水が壁のように盛り上がり、流れ落ちて押し寄せてきた。「空気の精の人々」は飛び立って、空の果てに舞い上がった。

空の果ての天蓋に行くと、上からそこに穴があることを教えるものがいて、上の第二世界にたどり着いた。そこは青い世界で、「ツバメ族」が住んでいた。そこでも間もなく「空気の精の人々」が「ツバメ族」の首長の妻と姦通を犯してしまう。怒った首長に「空気の精の人々」は追い払われる。彼らは飛び立った。

飛び立った「空気の精の人々」は空の天蓋に行き着き第三世界にたどり着く。そこは黄色の世界で、「黄色バッタ人」がいた。彼らに受け入れられて「空気の精の人々」は互いに親しく暮し始めた。暫くするとまた同じことが起こり追い払われる。彼らは飛び立ち、上の世界への抜け道を通って、第四世界にたどり着いた。出たところの地表は、赤と黒の混ざった色で、空は白、青、黄、黒のどれかを示していたが、下の世界とは異なり、それぞれの続く時間の長さが違っていた。青と黒がほとんどを占めていた。北の方にのみ、今迄見たことのない種族がいることがわかった。かれらは「縦長の家に住む人々」であった。彼らから受け入れてもらい、食料もわけてもらった「空気の精の人々」は、もう秩序を乱すようなことはすまいと話し合ってここに住むことにした。

Ⅱ－2－d－ⅱ　第四世界での創造

地下世界から第四世界への新参者は東の遠くから彼らに呼びかける声を聞いた。四人の神秘的な存在に彼らは取り囲まれた。今迄にこのような存在は見たことがなかった。彼らは「聖なる人々」である。地上の人々と違い死ぬことはない。呪術を行う、知的な人々である。空間を自由に移動できる。地上のものを自由に操る。そこに現れた「聖なる人々」は、「(白い体の)話す神」、「(青い体の)水を撒く神」、「黄色い体の神」、「(黒い体の)火の神」である。神々は身振りで何かを言った。しかし地上の人は何もわからない。神々は去っていった。

神々は四日間訪問を繰り返し、十二日目に再び四人の神が来た。「青い体の神」、「黒い体の神」はそれぞれ聖なる鹿皮を持ってきた。「白い体の神」は二つのトウモロコシの穂を持ってきた。一つは黄色でもう一つは白色の穂であった。鹿皮の頭部が西を向くように一枚敷いて、その上に二つのトウモロコシを穂先が東を向くようにして置いた。その上に頭部が東を向くようにして鹿皮を掛けた。白いトウモロコシの下に白い鷲の羽を置いた。黄色いトウモロコシの下に黄色い鷲の羽を置いた。そこに西から白い風が吹いた。皮を開けるとトウモロコシは消えていて、男と女が横たわっていた。白いトウモロコシはナバホの最も古い男の祖先に変身した。黄色いトウモロコシはナバホの最も古い女の祖先に変身した

このようにして創られた二人は「最初の男」と「最初の女」と呼ばれるべしと神は定めた。地上の人に命じて二人のために家を造らせた。そこに二人を入れ、夫婦としてここで暮せと、祝福した。四日経って最後の日に双子を「最初の女」は生んだ。しかしその二人は完全に男というわけでも、完全に女というわけでもなかった。ナバホの言う「ナドレ(nadleeh)」、白人の言葉でhermaphrodite(間性)である。四日置きにさらに四組の双子を生んだ。それぞれが夫婦として暮すようになった。五組産まれた双子のうち、最初だけが完全に成長してからも夫と妻として暮すことはしなかった。この後、神によって造られた者たちは神に連れられて山に籠もり、何か儀礼を行って呪力を授けられたことが示唆される。

また四組の兄弟姉妹たちは神の山から戻ってからは分かれて暮らすようになった。インセスト(近親婚)を恥じたのである。「蜃気楼人」とそれぞれが結婚したのである。

「最初の女」は子供たちがインセストをやめて蜃気楼人と結婚したことを喜んだ。しかしあまりにも簡単に最初の結婚が解消されたことを心配した。「最初の女」は結婚についていろいろ考えを巡らした。性的に互いが惹かれるようにペニスとワギナを作った。そこにコヨーテが現れ恥毛をつけて、より魅力的にした。

Ⅱ－2－d－ⅲ　男女の「分離」と「再会」

人々が第三世界から移り住んで八年経った。その間平和が続き、繁栄した。「最初の男」はその世界に住んでいるものの首長になった。彼は人々に方位とそれぞれの方角にある四つの山の名を与えた。そこには「聖なる人々」が住んでいると彼は教えた。彼らは別種の、知性のある、

呪術を行う人々であり、速やかにかつ遠くまで移動する力があると教えた。彼らは光線に乗ったりできる。彼らは苦痛も感じない。つまり「最初の男」は人々に物の名と神のあり方を教えたのだ。人々の様々な心得を教えたので、人々は彼を尊敬し、従うようになった。

「最初の男」は第四世界で偉大な狩人になった。妻に沢山の肉を与えることができた。それで彼女は太ってしまった。夫はある日素晴らしい鹿を狩って持ち帰った。妻はそれを調理して二人で食べた。食べたのち、彼女は夫にではなく、自分のワギナに感謝した。夫がなぜ自分に感謝しないのかととがめると、「最初の女」はもし私のワギナがなかったならあなたは狩りをしなかったでしょうと答えた。男は女のワギナがなければ何もしないのだ（とすら）彼女は言う。男は女のワギナが欲しいだけよ、と。男たちだけで物事が動いているわけではないとも「最初の女」は言う。女（だけ）でも何でもできる。私たちは男など必要としない。ついに「最初の男」は怒って家を出てしまった。

翌日彼は村の中心に出て語った。すべての男を呼び集めた。女は連れてくるなと伝えた。男たちだけで川の向こう側に渡る。女が自分たちで何でもできると言うが、それを見ようではないかと、男たちに提案する。

ここで「最初の男」はナドレすら呼び集めた。ナドレはトウモロコシを碾いていたので、粉だらけの姿で最後にやってきた。女の世話にならずにナドレだけで作った物は何かと「最初の男」は聞く。碾臼を作った。コップと椀を作った。籠や他の道具を作った。「最初の男」はそれらを持って付いてこいと命じた。お前たちナドレは女であるくらいに男でもある。女どもに男がいないとどうなるか思い知らせてやろう。ほんの「一部分しか男でない」人々によって作られた物でも、それらがなければ何もできないことを思い知らせよう。

男たちは子をつくることのないナドレを連れて川を渡る。男たちは女だけでつくった物は一切置いてきた。女の手を借りてつくった物も置いてきた。女が一切関わりを持たない物だけを持ってきた。四日のうちに男たちは大いに働き基本的な生活の体制をつくり、女なしでやっていけると確信した。志気は高かった。

女たちは最初のうちは意気高らかだった。しかし男たちは勤勉に働いたのに女たちは享楽にふけり、四年目の終わりには男たちは余るほど作物を得て女たちは飢えた。しかし分離は男たちにも悪い影響を与えていた。男女ともお互いを恋い求めた。女は不自然な性的行為を始め、また男女とも様々な方法で自慰を始めた。

そのような男の一人である「包まれた男」（鹿の肝臓を暖めてそれでペニスを包んで性的満足を得ることを示唆している名前である。）がある時狩りに出た。夕暮れ近く鹿を一頭倒した。そこに野営することにして支度をした。ブッシュ・サークル（狩りに出ているときなど、枝などを房状にまとめそれを円形に囲いとして置き、野営地としたもの。野営の正しいマナーである。）をつくり、そこで火を焚く。男は夜を過ごすうちに、自分の欲望を妻の代わりに鹿の肝臓で満たそうとした。しかしそうするたびにどこかからフクロウの声が聞こえ、「それはやるな。食べる気がないなら肝臓には何もするな。」と言った。男はびっくりして止めるが、し

ばらくしてまた同じことをする。これが四回繰り返された。この後フクロウが姿を現し、分離を続けていては子孫ができないことを諭し、対岸では女たちが飢えて苦しみ、男たちを恋しがっていると伝える。「最初の男」を説得し女と再会するようにフクロウは言って去った。

「包まれた男」は「最初の男」にいきなり直接言うことはためらわれた。それで何人かの長老に集まってもらい伝えた。長老は同意し、「最初の男」に考え直してもらうことにした。分離から四回目の冬の終わりの頃には「最初の男」も分離が賢明な行動であったか疑問に思い始めていた。男たちは、分かれていては子孫が生まれず自分たちの世界が減じるだろうという。「最初の男」は、女たちは自分たちだけで生きていけると言ったことは悔いていることを「最初の女」から聞いて確かめ、彼らはまた一緒になることにした。男たちは女たちを筏で男の側に運び、女たちは体を清めトウモロコシの粉で体を乾かしたのち、再会をした。

Ⅱ—2—d—iv　第五世界(現在のナバホの世界)への「出現」まで

女たちが男たちと合流したのち、取り残されてしまった母娘がいた。泳いで渡ろうとするが二人の娘は「水の怪物（Big Water Creature)」に捕まり川に引きずり込まれた。水の底を捜索すると水底には四つの部屋のある大きな家があった。捜索の男と女は下りていったが、コヨーテも一緒に入っていたのに気づかなかった。

男女は水底の家の北の部屋で、「水の怪物」が座っているのを見つけた。彼の脇には彼自身の幼児が二人座り、反対の脇には彼が盗んだ娘二人がいた。男女は二人を要求して連れて帰った。ところがその時、付いてきたコヨーテが自分の着ているマントの下に「水の怪物」の子二人を隠して連れ出してしまった。人々はそれに気づかなかった。

この後、子供を奪われた「水の怪物」が地上に大洪水を起こした。人々は地平線全体にぐるりと囲むようにして山ほどの高さのある水の壁を見た。それは四方から迫ってきて、逃げることはできないように思われた。その時不思議な老若の二人の男が現れ、若者の方がまだ水に漬かっていない山の上に三十二の節のある三十二本の葦を植えた。それらはみるみる根を張り、丈が伸び、互いに絡み合って、東側に開口部のある巨大な幹のようになった。

若者は人々に入り口から葦の中に入るように言った。皆安全に中に入った途端に開口部は消えた。人々が中に入るか入らぬかのうちに外に打ち寄せてくる水の音が聞こえた。水位はぐんぐん上がったが、葦もどんどん水位よりも速く伸びた。しかし人々は自分たちの重みで倒れるのではないかと恐れた。幸いなことに「白い体の神」、「青い体の神」も葦の中にいた。そして「黒い体の神」もいた。「黒い体の神」が葦のてっぺんの穴から息を拭き、それが黒い雲となって、葦を支えた。葦はとうとう日が暮れる頃には空の頂上に着くほど高くなった。「黒い体の神」は髪飾りから鳥の羽を取り出し、葦の先端部からそれを突き出し、空に葦を固定した。

翌日バッタが頭上の空を掘り進んで、空の反対側の上の世界に出た。彼は大きな湖の中にある大きな島に出たのだった。島に足をおくと西か

ら黒い水鳥が、東から黄色い水鳥が近づいてくるのが見えた。彼らは上の世界の半分を支配していて、西と東を持っているから、自分たちができることをバッタもできたら、他の半分つまりこの世界の北と南側をやろうと言って技比べを挑んだ。彼らは黒い風からできた矢をそれぞれが持っていて、それぞれがその矢で自分の体を刺し貫いて、体の反対側から矢を引き抜いた。バッタは同じことをした。これを見て二羽の水鳥は戻っていった。全く同じことが、南から来た青の水鳥と北から来た光り輝く鳥との間で起きて、もう半分（西と東）もバッタに残して去っていった。空に開けられた穴は大きな人々が通り抜けて上の世界に出るには十分な大きさではなかったので、アナグマが送られてそれを広げた。これで「最初の男」と「最初の女」を先頭に皆第五の世界の地表に出ることができたという。

以上が「出現」までのあらましである。ここでのモチーフのバリエーションはバージョンによって様々ある。例えば分離の原因となる出来事では、ここでのように夫の権威を公然と無視することの他に、妻が不貞を働くことがあり、妻が子供たちの世話を含めて家庭を顧みずギャンブルなどにうつつを抜かしているというのもある。全体としては不貞をはたらく例が多い。不和になる当事者の地位も異なり、夫が「最初の男」であってもその妻が「最初の女」の娘であったり、また「最初の男」とは異なる首長が夫で「最初の女」とは別のものが妻である例もある。ナドレにしてもここでのように「分離」以前に導入されている場合もあるが、多くは「分離」の時突然登場する。またナドレが複数である場合も単数である場合もある。「分離」の際や「再会」の際に意見を求められ、ある程度影響を及ぼすバージョンもある。ここで紹介したゾルブロッド版ではナドレのその後が死という形であれ述べられているが、「再会」後はまったく触れられていないことの方が多い。

しかしそのような多様性があってもナドレの特徴は共通性を指摘できる。以下にそれをまとめ、ナドレの意味あるいは本質を考察したい。その過程で、ナドレが現在そうであると一部の人々によって主張されているような「第三のジェンダー」であると神話的世界においても考えてよいか、判断がつくであろう。

Ⅲ　考察

Ⅲ—1　ナドレの特徴

神話・伝説に描かれたナドレには次の五つの特徴がある。

①男女とは別の、独立の、「男でもない、女でもない」存在として神話に登場すること。

②身体の面での性的な特徴がその存在の差異化に関係していること。すなわち外性器の形態がhermaphrodite（両性具有、もしくは間性）とされていること。そして、この特徴から派生するいわば系（コロラリー）として、性的に不活性であること、つまり性関係を誰とももたないこと、生殖に関与しないこと、を特徴としてここに含める。

③地下世界から現在の世界に「出現」する過程での、男女の「分離」のエピソードにおいて活動するが、それ以外の場面では（ほとんど）登場しないこと。

④女ではないのに女の仕事をするとされていること。あるいは男のために女の仕事をする存在とされていること。

⑤何らかの形で敬意を持って遇され、多少なりとも特別な存在と社会的にみられていること。

本稿の関心からいえば、「分離」のエピソードにおけるナドレの扱いが問題になる。ほとんどのバージョンでは②の「性的に不活性」という特徴ははっきりと描かれているか、はっきりとは述べられてはいないものの、特に性的な行為があると示唆されてはいないかのどちらかである。ところが一点だけ飛び抜けて異質なバージョンがある。ゴールドツースの語ったフィシュラー版である。「分離」のエピソードで男たちが川を筏で渡るとき、「ナドレと呼ばれる、女の服装をし女のように振る舞う、しかしペニスと睾丸を持つ者たちを連れて行った。男たちの他の者はこれらナドレたちを性交の相手として使った。四人のこれら男―女（man-woman）が川を渡って連れて行かれた。男たちはこれら四人（のナドレ）にトウモロコシを碾くことと性交することとを依存した。」（Fishler 1953:25）とある。

この語りのテキストの途中にフィシュラーはパーレンで囲んで注とも解説ともつかぬ文章を挿入している。その中にゴールドツースの発言をそのまま引用する形でナドレについて説明している。それは「〝これらのナドレは男の性器とかつ女の性器を持っていて、男とも女とも性関係を持つことができる。しかし性腺はないので、子を持つことはできない〟」（loc. cit.）（傍点部強調は原文）ということである。この言明自体が混乱しているか曖昧であるかであろう。ここで性器と訳したのはsex organであり、性腺と訳したのはreproductive organである。前者は外性器であることは明らかであり、女の場合後者は卵巣だけではなく子宮も含む内性器的概念であろうが、概念的な対立が分かればよいとしてこのように訳した。「ペニスと睾丸を持」てば男の性器と性腺の両方を持つはずで、語りと注記の発言とが矛盾するのである。

フィシュラー版はこれ以外にも他と比較して極めて異例な特徴を持つ。他のバージョンは皆地下の世界に既にいたものがそこからの上昇を通じて現在の世界に「出現」する。その後に現在の世界の形成が徐々に行われていく。このフィシュラー版だけが至高神的な存在である「風」（Supreme Sacred Wind）による創造の過程を通じて世界が形成されてゆく。地下からの上昇のモチーフはない。それはあたかも旧約聖書の創世記を思わせる。至高神以外の、後から出てきたマイナーな神的存在も創造を行う。思念するだけでそれが形になっていく。フィシュラー自身もこの至高神による創造はこれまで出版された他のバージョンには見られないと認め、その他にもこのゴールドツース版は他の大多数と異なる特徴を持っているとしている（Fishler 1953:7-8）。

フィシュラー版は採録の時期がもっとも新しく、一九五〇年である。

採録当時話者であるゴールドツースは五十歳から六十歳であったようだ。先の例のように、読んでみて大幅に白人とキリスト教の影響を受けたバージョンとの印象を持つが、そうであるとするなら恐らく採録の時期や語り手の比較的若い年齢が関係していると思われる。ゴールドツースについては、それまでに経験した仕事の履歴以外その家族関係や生育過程など個人的背景はフィシュラーは論文の中で紹介していない。従って影響の断定はできない。ゴールドツース自身はこの話は六〇〇年前から伝わってきた古いものだと言っているようだ。しかしこのナドレ像については、これまで白人によって抱かれてきた「ベルダーシュ」の「ステレオタイプ」そのものというべきで、むしろそこからの影響を強く疑わざるを得ない。本稿ではこの版はいわばカッコに入れて、議論の中には組み込まないことにする。

Ⅲ―2　第一の解釈

これ以外のバージョンによって、これらの要素からナドレの意味を理解しようとするとき、二つの解釈が成り立つ。

第一の解釈として、ナバホの生業形態の変化の過程で生じた男女の力関係の葛藤を反映し、それを解決あるいは調停するための存在とする見方が成り立つ。「分離」のエピソードは男中心の狩猟社会から女の力が増大する農耕社会への移行において、揺らぎかけた男のヘゲモニーを回復する男の側の戦いと理解することができる。そこにおいて男だけの生活を成り立たせ、分離をやり抜くことを可能にし、最終的に男の優位を獲得させたのはまさにナドレの存在なのである。

この解釈を支える前提はいくつかある。まず、神話では（そして伝統的な社会でも）ナバホの日常生活がはっきり男の領域（仕事）と女の領域（仕事）とに分けてあることが指摘できる。互いの領域を超えて仕事をすることはできないのである。つまり男は女の仕事をできない。例えば食事は妻など誰か女性が用意してくれなければ、男は食べることができないのである。男が自分で調理することは文化的に禁じられていて許されない。

しかしながら、これはまた日常的な男女の関係の緊密さをも意味する。この緊密さは必ずしも性関係におけるそれのみを意味するものではなく、生業の、ひいては彼らの生活全体の日常の中での、それを意味する。デュルケムの指摘するように、異質さは相互の依存を通じて社会的連帯を強化するのである。つまりナバホの日常は男女二つのカテゴリーの協力を前提に組み立てられているといってよい。

これはいわゆる未開社会、あるいは前近代の伝統的社会においては、イリイチの指摘するように、むしろ普通のことである（cf. イリイチ一九八四）。とするならばナバホにおいても、もし女なしで女が行う仕事をしようとするなら特別な仕掛けが必要になることは明らかである。それがナドレである。「分離」において、ナドレは女の道具（女の仕事のための、あるいは女がつくった道具）、女の管理である植物の種子などを持ち、食材の準備や料理や乳飲み子の子育てなどを「女以上」に巧みに行った。

このような、男のために女の仕事をする存在は女ではあり得ない。女

であるなら「分離」の時に男に伴うことはできなかったからである。同時にそれはまた明確に男であることもできない。男なら女の仕事はできないからである。女の仕事をする以上男であってはならず、男に伴い川を渡る以上は女であってはならない、そういう存在なのである。この「分離」のエピソードは、便宜的に男に女の仕事をさせるのではなく、「男でもない、女でもない」存在を特別に、かつ論理的に必要としたのである。

こういう本質を持つナドレは、はっきりと誰にも分かるような特徴付けをしなければならない。身体的な特徴付けは存在の差異化にはしばしば用いられることは、文化研究の観点からはよく知られている。[2] ここでも同じことが行われ、身体的な性が「男でもない、女でもない」とされたのである。ナドレはいわば普通の男や女とは異なる「有徴化」された存在となった。

ナドレをこのように見ることは、ナバホの宇宙観においては性についての二元的対立が基本であるとする立場を前提にする。そして、それは先にみたように正当な理解である。従って、ナドレは一種の非日常的な（男女の有機的連帯に基づく社会において、女を排除して男だけの生活をすることは極めて異常なことである。）危機的な状況の中で初めて意味を持つものとして理解することになる。

ナドレが「第三のジェンダー」かという問題からいえば、危機的な状況でのみ必要とされる（アドホックな）存在と理解できる以上、男女と並ぶ日常的に安定したカテゴリーとしての「第三のジェンダー」ではあり得ない。

ナドレの意味として「第三のジェンダー」ではなく、男女とは別な次元の非日常的な存在として理解するその他の根拠の一つは、ナドレは「分離」のエピソードにしか登場しないことである。「分離」と「再会」以降に、性が曖昧なナドレとして登場することはない。それどころか、ゾルブロッド版では男女の再会が果たされ、現在の第五世界に移行した段階で、ナドレ（の一人）は死んでしまうのである。それは死をはっきりとこの世にもたらし、死者（亡霊）を恐れる慣習の基になった死なのである。

この第一の解釈は、最初に提示した五つの特徴でいえば、③と④と⑤を重く見る立場である。①と②については、それら三点を成り立たせるために必要となってくる派生的なあるいは二次的な、しかし論理的に必然的な要請であると考えることになる。

Ⅲ—3　第二の解釈

これに対してむしろ特に②を重視し、それによって①も根本的な特徴と考える解釈が可能であり、これをここでは第二の解釈として論じる。

この立場では、ナドレが登場するときの特徴付けとして、性が中間的な「男でもない、女でもない」あるいは「男でもあり、女でもある」存在として提示されることをその本質として注目する。明らかにこの特徴は人も含めた動物の外性器などの観察に基づくものであろう。狩りの対象としている哺乳動物には、身体の外的性徴が完全なオスともメスとも

決めかねるような形態（必ずしも外性器に限らない。牡鹿の枝角、牝鹿の乳腺などもナバホはこの手懸かりとしていた。）の個体、「間性」といわれる個体が一定の割合で出現するようだ。当然そのような個体は繁殖もできない。それは狩猟民であったナバホは経験的な観察で熟知していたであろうと思われる。ナドレは、先ずもってそういう間性的な特徴を持つ存在として登場する。

ナドレと狩猟民生活との関連は、その登場の時期からも理解できる。地下世界から現在の世界への「出現」の過程で、地下世界においてそれは登場する。まだ狩猟民の生活が基本であった頃を反映していると思われる段階である。

しかし普段の仕事の分業は、神話においても男女の二項対立的な二分法に基づいているのであるから、そこにはこの中間的な存在は適切に収まる場所はない。それで、女ではないのに女の仕事をする存在として位置づけられているのであろう。しかし、そうである必然性は神話からは理解できない。とにかく「分離」のエピソード以前からナドレは女の仕事をするとされている。第二の解釈では、ナドレのそういう性質がたまたま「分離」では男に有利に働いたのである。しかし、生物学的に「間性」的な存在を、男に共感して従い、男のために女の仕事をこなす存在に文化的に変化させる力は、神話の中には（内在的な論理として）やはり見出すことはできない。実際に、「分離」の際に渡河を渋るナドレの登場するバージョンもある（Stephen 1930:98）。

このように、最初に提示した特徴の②と①をある固定的なものと考え、その形態をナドレの本質と考えると、③とことに④はここに論理整合的に接合することが難しくなる。例えばなぜナドレは「分離」のエピソードにしか登場しないのか。さらに、性による役割分業の越境の点では論理的に同等のはずなのに、なぜ男の仕事をする男でない存在は出てこないのかなどは、うまく理解することができなくなるのである。

それはやはり、神話のベクトルが狩猟生活から農耕生活への方向性をもっていることを前提にしなければ理解できないことである。男でないのに男の仕事をするとは、すなわち狩猟や時には戦闘を行うことを意味する。それは生ずるとしたら狩猟社会でのことだが、そこでは男でないのに男の仕事をすることは単純に男に拒否されてしまうだろう。「出現」は狩猟社会（地下世界）から農耕社会（現在の世界）への移行を描いている。狩猟社会では動物は獲物として男が扱うが、女は植物の採集を行い、植物と女の親和性は狩猟社会でも高い。女は種子を得て栽培を始める。そういう変化の中で男も農耕社会に「移行」させる仕掛けが必要になる。女でないのに女の仕事をすることは男にとって存在をかけた必然性がある事柄である。それをナドレを介して可能にしたのである。あるいはナドレはその移行を男に可能にしたのである、という方が適切かも知れない。こうしてみるとナドレの本質は身体的な、従って固定的な性の特徴による、ある面それとして安定したカテゴリーとしての存在ではなく、変化や移行の中で意味を持つ存在なのであると理解せざるを得ない。つまりやはり特徴③、④を前提にしない限り②と①はそれだけでは神話の中で意味を持たないのである。

第二の解釈では、身体的特徴を根拠にすればナドレを男女と並ぶ一つのカテゴリーとしての「第三のジェンダー」と見ることが成り立つようにも思える。しかし形式的に成り立つようでもここでみたように本質的な疑問は避けることができない。むしろナドレの本質は安定した「存在」ではなく、「変化」や「移行」と考えることが適切なのではないか。それは「ナドレ」という言葉の持つ言語的意味を考え合わせることでよりよく理解できる。そしてこの見方を導入することで、二つの解釈の対立を止揚した高次の理解を得ることができるであろう。

Ⅲ－4　変化と移行

ナドレは言語的には「変化する」という意味が基本になっていることは様々なところで研究者によって指摘されている。神話の中でナドレということばが構成要素としてその名に入っている他の存在を見ると、「熊に変わった乙女」と「変化する女」がある。[3]

「熊に変わった乙女」は、「出現」後の物語でコヨーテがトリックスターとして出てくるエピソードの中で登場する。それは本質的には人と動物との異類婚姻をモチーフにした話の変形と見なすことができる。狩人の兄弟の中にいるただ一人の妹として兄たちの世話をしている乙女のところに、コヨーテが現れ性的に結びつく。それを知った兄たちはコヨーテを排除しようとして策略を巡らせ、最後はコヨーテを殺す。それを知った妹は兄たちに復讐するために熊に姿を変え次々に兄を襲う。復讐をほとんど遂げても最後は一番下の弟に殺される。弟は妹を生き返らせ、妹は熊の姿のまま森に入ってゆく。ここでは女が熊に変わるのである。

もう一つ例として、狩人の兄弟の妹が鹿と結びつく話をここに並べれば「熊に変わった乙女」の意味は明瞭になる。鹿を狩っている兄弟の妹が夜な夜な家を出るようになる。そのうち家の近くでも楽に鹿を狩ることができるようになる。それは妹が鹿の子供たちを生んでいたからであった。兄弟は妹を鹿の側にやらないようにするが失敗する。妹は狩りのルールを弟に伝えて鹿に変身して去る（Luckert 1981:70-79）。これは変身のモチーフであるとともに、鹿を殺す狩人が代わりに獲物である鹿に自分たちの女性（妹）を与えるという、いわば異類婚姻（外婚制）の形を取った命の交換のモチーフである。この点で「熊に変わった乙女」の物語は同質なのである。このように人の世界と動物の世界は対等の交換をして平衡を保っているという思想がうかがえる。

この異類婚姻譚についてルッカートは、狩猟社会に特徴的な、動物と人との区別が曖昧な「人間以前の流動状態（prehuman flux）」（Luckert 1981:133-65）を示すものであるという。ナバホ神話の地下世界段階では、昆虫や鳥やその他の動物や、風や雲や霞や雷や雨や霰や星や太陽などまでも、その中にある共通の本質があって互いにことばも分かり、姿形も自由に変えることができるような、そういうものであった。そのような存在の中に人の姿をしていたものがあったとしても、それはちょうどこの共通の本質が人の形の「着ぐるみ」を着ているようなもので、それを着ている限りで人であるという程度の相対的なものなのであった。動物と人とが着ぐるみを脱いで互いに姿を入れ替えることはごく自然な

ことで、そこには「人」という、他と隔絶した固定的なカテゴリーはまだ存在していない。「熊に変わった乙女」だけではなく、熊も女に変わることができるとされていたようだ。

このような世界では、「人／動物」という二項対立的なカテゴリーのセットはまだできていない。従って世界に「人」が出現するということは、絶対的に他と区別されたカテゴリーが生まれるということに他ならず、互いに入れ替わるような流動性が永遠に失われたことを意味する。prehuman fluxとはこの固定的なカテゴリーとしての「人」が出現する以前の流動的な状態を指している。

これに対して、「変化する女」は農耕社会のナバホにとって極めて重要な存在であるように思われる。若い娘から老女へ、そしてまた若い娘へと繰り返しあるいは絶えず姿を変えると考えられているのでその名がある。「変化する女」は、バージョンによって細部は異なるが「最初の男」と「最初の女」などの「聖なる人々」（神々）がトウモロコシの穂から作り出した。（バージョンによっては、このとき妹である「白貝の女」も生まれた。）太陽の精を受けて身ごもり男の子を産む。子供たちはたくましい若者に育つ。このころ人々は様々な怪物に襲われ犠牲になり、数が減少していた。その怪物たちは、先の「分離」の時に女たちが性的な飢餓の中でふけった様々な自慰や不自然な性行為などの結果生まれてきたものであった。「変化する女」（と「白貝の女」）の子供たちは怪物退治に赴く。その過程で父である太陽に会いに行き、武器と盾と鎧を得る。ほとんどの怪物が退治された後「変化する女」は太陽に求められて西の方の海岸の小島で暮らす。

「変化する女」は現在のナバホの直接の祖先である。彼女のからだからこすり取られた肌から様々なナバホの氏族が生まれた。彼らは東に戻りその土地に散らばり、トウモロコシなどを栽培して暮らした。ナバホは自らをナバホ語でdineすなわち「人」と称するが、いわばナバホがナバホになったときには農耕民として生まれたことになる。

このような脈絡での「変化する女」の意味は明らかであろう。「変化」は季節と作物との変化を意味している。冬は命の気配のない荒涼とした土地から、夏には作物に覆われた畑へと変わる大地の移ろい、あるいは種まきや芽吹きから収穫を経て枯死にいたる作物の姿である。「変化する女」は農耕と大地の隠喩なのである。

神話では「変化する女」の初潮の時、神々が集まってそれを祝う儀礼を行った。それが現在もナバホの娘たちの成女儀礼として伝えられている（cf. Roessel 1981, Begay 1983）。ナバホの女たちは「変化する女」を自らの原型的モデルとしているかのようである。農耕と結びつき、死と再生を繰り返すという意味で永遠に変化するものとして、女はイメージされているのである。不思議なことに、この農耕社会には、狩猟社会に存在したかもしれない男の通過儀礼は知られていない。

このように見れば、「ナドレ」ということばの意味する本質は「変化」であることは明瞭だ。一見「熊に変わった乙女」と「変化する女」の変化の意味は同じではないように思える。前者は狩猟社会のprehuman fluxを背景にした、姿形の大きな変化である。後者は同一性を保持した

上での、その（若さと老い、芽生えと枯死などの）いくつかの対極的相の間での変化あるいは移行である。これは安定した農耕社会での発想である。しかし先に述べたように「熊に変わった乙女」の場合も基本的には人と動物の、究極的には命の交換であるような、相互変換可能な変化あるいは移行なのである。二つの話に本質的な意味の差はないということができる。

変化をこのように理解した上で神話のナドレの本質を考えるならば、ナドレを固定的なカテゴリー（「第三のジェンダー」）と見ることは難しくなる。そもそもカテゴリー化すること自体が、ナドレの活躍した、狩猟民のエートスが残る地下の世界には相応しくないのだ。不思議なことに、そこでは「人／動物」のカテゴリー以前に成立している確かなカテゴリーは、なによりも「男／女」のカテゴリーだったのだ。

従って、間性的な特徴も男や女からの変化として捉えているのではないかと推論することができる。あえて踏み込んでいえば、ナバホ的思考においては間性だから特別なのではなくて、「変化している＝ナドレしている」から特別なのだ。そういうものであるからこそ敬せられて、先の、特徴⑤が成立する。そして、だからこそ現実のナドレについては真と偽が問題になるのである。

ヘイルはナドレについてのまとめの議論で、真のナドレと偽りのナドレ（そういわれているだけのナドレ）の区別をナドレに関する本質的な事柄としている（Haile 1978:161-68）。それはまたヘイルの神話や儀礼のインフォーマントになった、多くの伝統的な知識を持つ年寄りたちの共通の認識であった。年寄りたちは同性間性交のような行為には極めて否定的であった。フィシュラーもヘイル神父から直接得た情報を次のように記している。「神父の居留地での五十年間の調査でも、真のナドレは一人も見つからなかった。ホモセクシュアルや性的倒錯者はいた。しかし真の両性具有者（bisexual）はいなかった」（Fishler 1953:25）。

ことによるとヘイルとナバホの年寄りたちの「真の」が意味しているものは同じではなかったかも知れない。ヘイルは（当時の西洋人のように）あくまで性器の特徴という身体的なことにこだわってナドレの真偽を考えていた可能性がある。しかし年寄りたちはむしろ「変化している」ことを重んじていたのかも知れない。性器の形は「変化する、している」という本質のいわばかりそめの、ある表現に過ぎない。畏敬すべきはある形の性器を有していることではなく、そういう現れ方をしている「変化すること」そのものであると理解すべきではないかと思う。

Ⅳ　まとめ

考察では二種類の作業を行った。（1）「個体としての（人物としての）ナドレ」を神話の中で分析し二つの解釈を通じてナドレの意味あるいは本質を考察した。（2）その過程で「変化するもの」としてのナドレの意味がその名に含まれている存在を「個体としてのナドレ」にこだわらず検討した。

解釈における第一のものは論理的にわかりやすい。ナドレを何らかの実体としてしか考えない常識的な思考は第二の解釈に親和性があるかも

知れない。しかしそのいずれの解釈においても、ナドレは「第三のジェンダー」とはいえないと判断する。

むしろ（2）の作業を通じて神話上の人物としてのナドレは「熊に変わった乙女」や「変化する女」と共通の意味をもつ「ナドレすなわち変化すること」の一部に過ぎないことに思い至った。ナバホの宇宙観の最も古層において、人と動物は相互に変換しても、男女だけは互いに概念的に対立していなければならない。自らが「変わる」ことでそのような男女の質的なあるいは存在的な懸隔を、逆説的なようだが、むしろ守るものが実はナドレなのだ。

「出現」に端的に表れるナバホ創世神話の根底的なモチーフは、何重もの「変化」あるいは「移行」であることが分かる。人や動物の区別のない世界からはっきりとした差異のある世界へ、狩猟社会から農耕社会へ、地下から地上へ、などの大きな「移行」や「変化」が、ナドレや「熊に変わった乙女」や「変化する女」の姿でもいわば変換されて、同じテーマの変形として表現されているのだ。ナドレは多重的な変化や移行の中でその本質的な意味を獲得し、かつ表現している存在であるといえよう。

［謝辞］

本稿は平成十七年度跡見学園女子大学国内留学制度による留学の成果の一部である。学園および留学先の明治大学にお礼を申し上げる。また資料は平成十五年度に同後援会による海外出張助成により可能になった米国出張で得たものが多い。大学当局及び関係各位に感謝申し上げる。留学中及び本務校復帰後も多くの大学図書館で資料を複写したり取り寄せて頂いたりした。それら図書館の専門的助言と行き届いた支援にもお礼申し上げる。

注

（1）先に筆者は藤崎二〇〇三において、ヒジュラやベルダーシュなどの性的な少数者について、日常的な「人のカテゴリー」として理解できるか、あるいは非日常的な例えば「聖なる存在」として理解すべきかなどを、研究史的な検討も含めて概観的に考察した。

（2）例えば口寄せのような常人とは異なる特別なことができることと盲目であることを結びつけている東北地方のイタコなどの例（藤崎一九九八）や、アメリカ文化で良い食品やエクササイズの機会などを得にくい貧困層の人たちが、自分たちの社会的に剥奪されている地位について何らかの主張を行うとき、いわゆるジャンクフードなどによる肥満を可視的にあるいは「記号」的に演じなければならなくなってしまうアイロニーなど（内田二〇〇五：199-202）を考え合わせれば、可視的あるいは身体的な記号性は了解できるであろう。

（3）創世神話ではなく、儀礼神話には「ベゴチディ」という登場人物（神）がナドレであるとされているものがある。兄弟姉妹近親相姦の禁止と、違反による精神錯乱を治療する「Mothway」という儀礼の起源をのべている「Mothway Myth」である（Haile 1978）。これはまた氏族外婚性の起源をも示している神話だが、ナバホの神話的世界の中ではベゴチディ自体が極めて複雑な人物（神格）である（Luckert 1975）。ヘイルの神話では、ベゴチディは両性具有的であり、性的には活動しないが、しかし若者や娘の性には強い関心を持つという真に矛盾した存在として描かれている。現在のところは理解が十分に行き届かないので、将来の課題にしたい。

参考文献

後に付した1～9は本稿で参照したナバホ神話テキスト

Begay, Shirley M. 1983. *KINAAALDA A Navajo Puberty Ceremony.* Rough Rock: Navajo Curriculum Center.

Blackwood, Evelyn. 1986. *The Many Faces of Homosexuality; Anthropological Approaches to Homosexual Behavior.* New York: Harrington Park Press.

Broch, Harold. 1977. "A Note on Berdache among the Hare Indians of Northwestern Canada." *The Western Canadian Journal of Anthropology* vol.Ⅲ,no.3, p.p. 95-101.

Fishler, Stanley A. 1953. "In the Beginning: A Navaho Creation Myth." *Anthropological Papers* 13. University of Utah, Department of Anthropology. ……1

藤崎康彦　一九九八「東北地方の巫者の一類型と意識の変容状態」大胡欽一編『アジア世界：その構造と原義を求めて［上］』八千代出版　所収（五七―八五頁）

藤崎康彦　二〇〇三「多様な性／ジェンダーについての一考察―インドのヒジュラとアメリカ先住民ナバホ族の「ベルダーシュ」の事例を通して―」『跡見学園女子大学文学部紀要』第36号三九―五五頁

藤崎康彦　二〇〇七（刊行予定）「文化研究と神話テキスト」『人文学フォーラム』第五号

Goddard, Pliny E. 1933. "Navajo Texts." *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* Vol. 34. ……2

Haile, Berard. 1940. "A Note on the Navaho Visionary." *American Anthropologist* (n. s.) vol. 42 no.2, p359.

Haile, Berard. 1942. "Navaho Upward-Reaching Way and Emergence Place." *American Anthropologist* (n. s.) vol. 44, p.p.407-24.

Haile, Berard. 1978. *Love-Magic and Butterfly People.* Flagstaff: Museum of Northern Arizona Press.

Haile, Berard. 1981a. *Upward Moving and Emergence Way.* Lincoln and London: University of Nebraska Press. ……3

Haile, Berard. 1981b. *Women versus Men.* Lincoln and London: University of Nebraska Press. ……4

Herdt, Gilbert. ed. 1996. *Third Sex, Third Gender.* New York: Zone Books.

Hill, Willard. 1935. "The Status of Hermaphrodite and Transvestite in Navaho Culture." *American Anthropologist* vol.37, p.p.273-79.

イリイチ、I.一九八四『ジェンダー』　東京　岩波書店

Jacobs, Sue-Ellen. et. al. 1997. *Two-Spirit People: Native American Gender Identity, Sexuality, and Spirituality.* Urbana and Chicago: University of Illinois Press.

Klah, Hasteen. [1942] 1980. *Navajo Creation Myth.* New York: AMS Press. (AMS reprint) ……5

Kluckhohn, Clyde. [1944] 1967. *Navaho Witchcraft.* Boston: Beacon Press.

Kluckhohn, Clyde and Dorothea Leighton. 1974. *The Navaho* (revised edition). Cambridge: Harvard University Press.

Lang, Sabine. 1998. *Men as Women, Women as Men.* Austin: University of Texas Press.

Levy, Jerrold E. 1998. *In the Beginning.* Berkeley: University of California Press.

Luckert, Karl W. 1975. *The Navajo Hunter Tradition.* Tucson: The University of Arizona Press.

Matthews, Washington. 1994. *Navaho Legends.* Salt Lake City: University of Utah Press. ……6

Murray, Stephen O. and Will Roscoe. 1998. *Boy-Wives and Female Husbands.* New York: St. Martin's Press.

Nanda, Serena. 2000. *Gender Diversity: Crosscultural Variations.* Prospect Heights: Waveland Press.

O'Bryan, Aileen. [1956] 1993. *Navaho Indian Myths.* New York: Dover Publishing, INC. ……7

Roessel, Ruth. 1981. *Women in Navajo Society.* Rough Rock: Navajo Resource Center.

Roscoe, Will. 1998. *Changing Ones: Third and Fourth Genders in Native North America.* New York: St. Martin's Press.

Spencer, Katherine. 1947. "Reflections of Social Life in the Navaho Origin Myth." *University of New Mexico Publications in Anthropology* no.3

Stephen, Alexander M. 1930. "Navajo Origin Legend" *Journal of American Folklore* Vol.43, p.p.88-104. ……8

内田　樹　二〇〇五　『街場のアメリカ論』　東京　NTT出版

Williams, Walter. 1986. *The Spirit and the Flesh.* Boston: Beacon Press.

Zolbrod, P. G, 1984. *Dine bahane, The Navajo Creation Story.* Albuquerque: University of New Mexico Press. ……9